一側性難聴者が抱える生きにくさについての考察

第 6 章 6.1-2

一側性難聴者は、見た目で障害を持っていると判断されず健聴者と同じ扱いを受けているが、日常生活の中でたくさんの障壁とぶつかりながら生きている。日頃から音に意識を持ち、必要な音を聞けるように意識的に行動をしている。特に、コミュニケーションを必要とする状況では、環境音や立ち位置などの条件によって聞こえの具合も変わってくる。コミュニケーションを取る必要のある相手の数が多くなると、処理すべき音の数が増えるため、複数人で商業施設に行く場合の方が障壁を感じやすい傾向にある。

本研究では、おもてなし接客が基本となる百貨店では、1 人で訪問する場合でも店員とのコミュニケーションが増え、普段積極的に音を聞こうとしている人ほど障壁を感じやすいことがわかった。また、若い人の方が 1 人で商業施設に行くときはイヤホン等で音を遮断することにより障壁を対処すると考えられた。当初は商業施設への訪問頻度は、障壁度合いと関連していると仮説を立てていたが、年齢や居住地域が関係していることが明らかとなった。

一側性難聴者のレストランの音環境における障壁要因への対応

第 6 章 6.3.1

聴覚環境的に関わりがあるもの

①人数
1 人・2 人・3 人・4 人・それ以上

▼

②同行者が一側性難聴への理解があるか
理解があり配慮してくれる・してくれない

▼

店側が決めるもの

③座席の種類
カウンター・テーブル・座敷・立ち食い

客が決められる場合もあるもの

▼

④フロアのどこにあるか
壁や窓側・フロアの内側

▼

⑤テーブルの形状
まる・長方形・正方形

▼

⑥机の大きさ
向かい合った時に距離があるかどうか

▼

⑦パーテーションの有無
店舗によって異なる

▼

⑧椅子の並び
横並び・向かい合わせ

▼

⑨どこに座るか
音を聞きやすい席を確保できるか

客が決めるもの

▼

⑩BGM および環境音
周りの客の話し声はどれくらい聞こえるか、距離は近いか

着席後に障壁がわかるもの

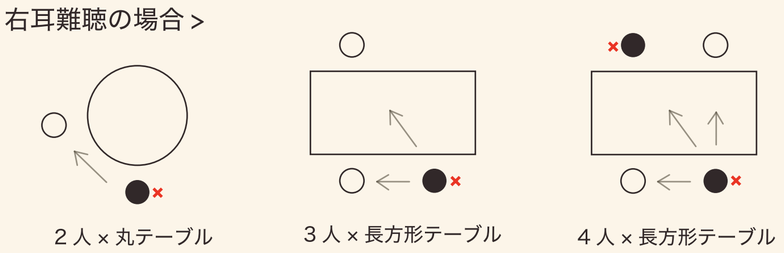
1 人のときに対応すべき障壁要因
2 人のときに対応すべき障壁要因
3 人のときに対応すべき障壁要因
4 人のときに対応すべき障壁要因
それ以上のときに対応すべき障壁要因

一側性難聴者にとってレストランは障壁の頻度が多いことが明らかとなった。そこで、一側性難聴者がレストランでの障壁に対応するために配慮していることをフローチャートとした。

一側性難聴者はカクテルパーティー効果がないことで複数の音情報から聞きたい音だけを聴くことができない。1 人でレストランに行く場合は、障壁への対応は少ないが、複数人の場合は同行者との関係性によって座るべき席が変わるなど、多くの対応が必要になる。

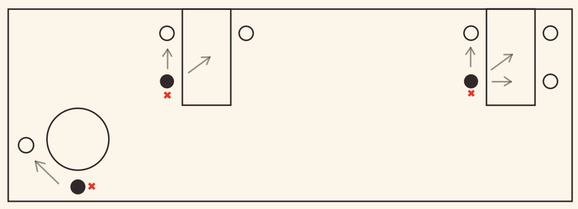
一側性難聴者にとって長時間位置が固定されるときのポジショニングはとても重要である。多くの一側性難聴者が、⑨どこに座るか にとても気を遣っており、特に複数人で席に着く場合は難聴耳側に人がいないように日頃から意識している。

< 右耳難聴の場合 >



⑩BGM および環境音 は着席してから判明する障壁である。複数人のときは店員とのコミュニケーションが加わることにより、多方向からの音に反応できない。しかし、同行者が一側性難聴の特性について理解がある場合、店員らとのコミュニケーションを同行者に任せることで、自身は同行者との会話に集中することができる。あえて難聴耳側がフロア全体に向くように着席することで、障壁を減らすことができる。

< 右耳難聴の場合 >



気配の気づきにくさへの空間的対処

第 6 章 6.3.2

< 一側性難聴者が商業施設で気づきにくい気配 >

- 店員の声かけ
- 子供の飛び出し
- ショッピングカートの接近
- 他の来店客
- 自動車の接近 (駐車場にて)

< 気配に気づかないことで生じる障害 >

- 声かけにすぐに反応できず気まずくなる
- 接触事故に繋がる

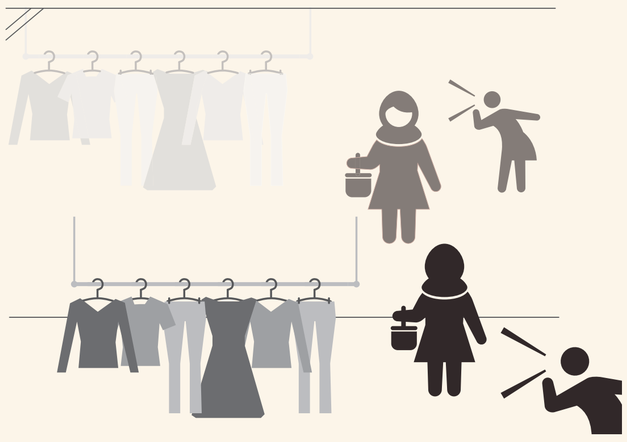
▼

空間デザインによる解決を目指す

両耳が機能していないことにより気づけない気配を、視覚情報から補うことで気づかせる提案

鏡の増設による対処

商業施設内に設置されている鏡の数を増やし、鏡により背後の様子が常にわかるようにする。



照明計画による対処

光源の数を増やし、常に多方向に影が作られることで、人の接近に気づくことができる。

結論

商業施設での音に関する意識調査から、一側性難聴者の生きづらさを明らかにすることができた。一方、音に関する障壁を感じている健聴者もいるように、一側性難聴者が抱える障壁が解消されることは健聴者にとっても生きやすい環境を創出することになる。

今回の研究においては空間デザインの観点から商業施設における一側性難聴者のための研究をしていたが、一側性難聴者の感じる障壁はコミュニケーションが円滑におこなえないことによるものも多いことから、一側性難聴の障壁に対する認知度を上がることを期待したい。

今後は修士課程において、一側性難聴者に自らの障害やそれによる障壁を感じさせない空間を設計課題として取り組み、音を楽しめる空間を実際に制作する。一側性難聴者にも健聴者にも心地よい音の空間を探求していきたい。